

前シテ：舟人 後シテ：鶴 ワキ：旅僧 間狂言：里人

ワキ「是は諸国一見の、僧にて候。我この程は、三熊野に参り一七日参籠、申して候。

又これより西国修業と、志候。急ぎ候程に。津の国芦屋の里に、着きて候。

日の暮て候程に。宿を借り泊らばやと、思ひ候。芦屋の在所の人の、渡り候

か。」

間狂言「在所の者と御尋ねは。如何様なる御用にて候ぞ。」

ワキ「行暮れたる、修行者にて候。一夜の宿を、御貸し候え。」

間狂言「御宿は安き事にては候えども。此の所の大法にて。方々の様なる往來の御僧

に。宿貸す事固く禁制にて候間。あれに見えたる洲崎の御堂へ御上がりあつて。

御泊まり候え。」

ワキ「あの御堂は方々に借るまでも、なく候。」

間狂言「ノウノウ御僧。その御堂へは夜な夜な化生の者が出ると申す間。心得て御泊ま

り候え。」

ワキ「法力をもつて泊まる間、苦しからず候。」

間狂言「イヤ、ねそいことを申す御僧じや。」

シテ「悲しきかなや身は籠鳥。心を知れば盲亀の浮木。ただ闇中に埋木の。さらば埋

れも果てずして。亡心何に残るらん。」

ワキ「何と見申せども更に人間とは、見え候。如何なる者ぞ名を、名のり候え。」

シテ「これは、近衛の院の御宇に。頼政が、矢先にかかり。命を失いし鶴と申しし者の

亡心にて候。その時の有様くわしく語つて、聞かせ申し候べし。跡を申おて、

賜わり候え。」

ワキ「さては鶴の、亡心にて候か。その時の有様、御物語り候え。跡を申おて、

参らせ候べし。」

地謡「さては近衛の院の御在位の時。仁平の頃おい。主上夜な夜な御悩あり。さる程

に案の如く。黒雲一むら立ち来り。御殿の上に蔽いたり。頼政きつと見上ぐれば。

雲中に。怪しき者の姿あり。」シテ「矢取つて打ち番い。」

地謡「南無。八幡大菩薩と。心中に祈念して。よつ引きひよおと放つ矢に手応えして

はたと当る。得たりや。おおと矢叫びして。落つる所を猪の早太つと寄りて続け

まに。九刀ぞ刺いたりける。さて火を灯しよく見れば。頭は猿尾は蛇。足手

は虎の如くにて。鳴く聲鶴に似たりけり。恐ろしなんども疎かなる形なりけり。

げに隠れなき世語の。その一念をひるがえし。浮かむ力となり給え。」

シテ「浮かむべき。便渚の浅緑。三角柏にあらばこそ沈むは浮かむ縁ならぬ。」

地謡「げにや他生の縁ぞとて。」シテ「時もこそあれ今宵しも。」

地謡「亡き世の人に合竹の。」シテ「棹取り直しうつお舟。」地謡「乗ると見えしが。」

シテ「夜の波に。」地謡「浮きぬ沈みぬ見えつ隠れ絶え絶えの。いくえに聞くは鶴の聲

恐ろしや凄しや。あら恐ろしや凄まじや。」中入

間狂言「最前往來の御僧の。宿借りたき由申されて候が。此の所の大法にて候間。

洲崎の御堂を御教え申して候が。ちと御見舞い申さばやと存ずる。イヤ、

ワキ「方々は最前宿貸し給わぬ、人にて候か。」 間狂言「尤も御宿は参らせたくは候
えども。此の所の大法にて 候間。是非に及ばず候。」

ワキ「御見舞い、祝着申して候。まず近お、御入り候え。物をたずね申したき、事の
候。」

間狂言「畏まつて候。さて御尋ねなされたきとは、如何様なる御事にて候ぞ。」

ワキ「思し召し寄らざる、申し事にて候えども今宵舟人の体にて不思議なる者来たり
て候間。いかなる者ぞと、尋ねて候えば。古しえ、近衛の院の御宇に。頼政が

矢先にかかつて、身を亡ぜし。鶴と申すもの亡身なる由、申されその後。またう
つお舟に乗ると見て姿を、見失いて候よ。」

間狂言「言語道断。不思議なる事を仰せ候ものかな。さては夜な夜な御堂へ上がる
化生の者は。その鶴の亡心にて御座有ろうずると存じ候。左様に候わば。暫く此

の所に御逗留成され、鶴の跡をも。懇ろに用うて御通りあれかしと存じ候。」

ワキ「我等も、左様に存じ候間。有難き御経をもつて弔い、申そおするにて候。」

ワキ「頼み申し候。」 間狂言「心得申して候。」

ワキ「御法の聲も浦波も。御法の聲も浦波も。みな實相の道廣き。法を受けよと夜と
共に。かの御経を。読誦する。この御経を読誦する。」

ワキ「一佛成道觀見法界。草木國土悉皆成佛。」

ワキ「有情非情。皆俱成佛道。」 ワキ「頼むべし。」 シテ「頼むべしや。」

地謡「五十二類も我同性の。涅槃に引かれて。眞如の月の夜汐に浮かみつここれまで

来れり。ありがたや。」

ワキ「不思議やな目前に来たれる者を見れば。面は猿足手は虎。聞きしに変わらぬ変化
の姿。あら恐ろしの事やな。」

シテ「さてわれ悪心外道の変化となつて。佛法王法の障りとならんと。王城ちかく
遍満して。東三條の林頭に暫く飛行し。丑三つばかりの夜な夜なに。御殿の上
に飛び下れば。」

地謡「即ち御悩頻りにて。玉體を悩まして。怯え魂消らせ給お事も我が為す業よと
怒りをなししに。思いも寄らざりし頼政が。矢先に当れば変身失せて。落々磊々
と。地に倒れて。忽ちに滅せし事。思えば頼政が矢先よりは。君の。天罰と。

当りけるよと今こそ思い知られたれ。その時。主上御感なつて。獅子王と云う
御劍の。頼政に下されけるを宇治の。大臣賜わりて。階を下り給おに折節
郭公訪れければ。大臣取りあえず。」

シテ「ほとどぎす。名をも雲居に。揚ぐるかなと。仰せられければ。」

地謡「頼政。右の膝をついて。左の袖を廣げ月を少し目にかけて。弓張月の。いるにかせ
とと。仕り御劍の賜わり。御前の。罷り帰れば。頼政は名を揚げて。我は。名を
流すうつお舟に。押し入れられて。淀川の。淀みつ流れつ行く末の。鶴殿も同じ蘆
の屋の。浦曲の浮洲に流れ留つて。朽ちながらうつお舟の。月日も見えず。冥き
より冥き道にぞ入りにける。遙かに照らせ。山の端の遙かに照らせ。

山の端の月と共に。海月も入りにけり。海月と共に入りにけり。」